

別紙①「提言骨子案」

仮タイトルです  
会議でご意見を頂きたいです

子どもたちの健やかな成長の  
ためにできること  
～生きる力を育む体験への関わり～

令和3年 月

柏市社会教育委員会議

提言書

## はじめに

私たち社会教育委員会では、これまで2期4年にわたり「子どもたちの体験活動」や「地域と学校の連携」について議論してきました。

「体験のススメ、失敗のススメ（平成29年2月柏市社会教育委員会提言）」では、子どもたちの近所に気軽に遊べる場所がなく、かつ、遊ぶ時間に余裕のない現状と、子どもたちの自己肯定感の低さとの関係について述べ、自己肯定感を高める体験活動について提言しました。またこの提言では、「失敗」することから学べるものの多さや成長のきっかけになる大切な経験であることを考えました。

「地域と学校の連携について（平成31年2月柏市社会教育委員会答申）」では、社会の動向と教育を取り巻く状況、及びそこから生まれた地域学校協働活動の動きを受けて、柏市の現状としての「学校現場」と「学校支援の体制」と連携への課題について述べました。

またこの答申では、柏市らしい「地域と学校連携・協働活動」の在り方への提言として、子どもを地域の主役に位置付けるという方向性や、地域への愛着と人間関係の強化といった目標を掲げ、「子どもたちによる地域情報マップの作成と活用」など具体的な取組を提示しました。

これらの流れを受けて、今期はより実践的な活動者の意見を聞くため、新メンバーを迎えスタートしました。

子どもたちの心身の成長には様々な体験の積み重ねが必要です。しかし、核家族化や地域の繋がり希薄化が指摘される現代において、体験とは成長過程で自然に得られるものだけでなく、大人の関わりを必要とするものであると考えます。

多くの場合、体験とは「活動」そのものを目的とするものではありません。例えば「山登りをすること」が大事な訳ではなく、登る途中で初めて見る景色や植物があったり、友達と励まし合って最後まで登れてうれしかったなど、その体験から得た一つ一つのプロセスに価値があると私たちは考えます。

しかし、こうした体験を子どもたちにして欲しいと思った時、保護者、学校、地域団体のどれかだけでは十分とは言えません。なぜなら、「体験」には、より多くの場面、より多くの人との関わりが重要になってくるからです。

この提言では、子どもたちのより良い体験のために大人個人ができること、また大人同士と一緒にできることを考え、具体的なヒントになりそうなことをまとめました。

親や先生はもちろん、地域の大人みんなに大事にされて育ったという実感は、子どもたちにとって体験と並ぶ大きな力になりうると、私たちは考えます。

また、社会教育委員会議の場において引き続き子どもと地域に目を向けた議論を深めることにより、柏市において始まったばかりのコミュニティ・スクールの活動や、地域で活躍する青少年育成団体などの活動を後押しし、共に活動するきっかけにできたらと思うものです。

柏市社会教育委員会議

## 目次

1	現状認識	1
2	今期のテーマ 仮・子どもたちの健やかな成長のためにできること	4
3	提言	
	① 大人がつながろう，大人自身が楽しもう	5
	② 子どもを主役にしよう	7
4	地域での活動 実践例から	9
	① 柏市立大津ヶ丘第二小学校	
	② しこだ児童センター	
5	おわりに	10

## 参考資料

社会教育委員会議 協議の経過

社会教育員会議 委員一覧

# 1 現状認識

昨今、子どもたちを取り巻く環境の変化が大きく取り上げられています。いよいよ人生100年の時代を迎えると同時に、日本は既に人口減少の時代に足を踏み入れました。

また、高度情報化社会における人工知能などの技術革新に伴い、2030年に社会に出る子どもたちが就く職業の65%は、現在存在しない職業であるとの予想もあります。大きな変化の先にある未来を100年生きる子どもたちのために、今大人ができることは何か、このことを考える必要があると私たちは考えます。

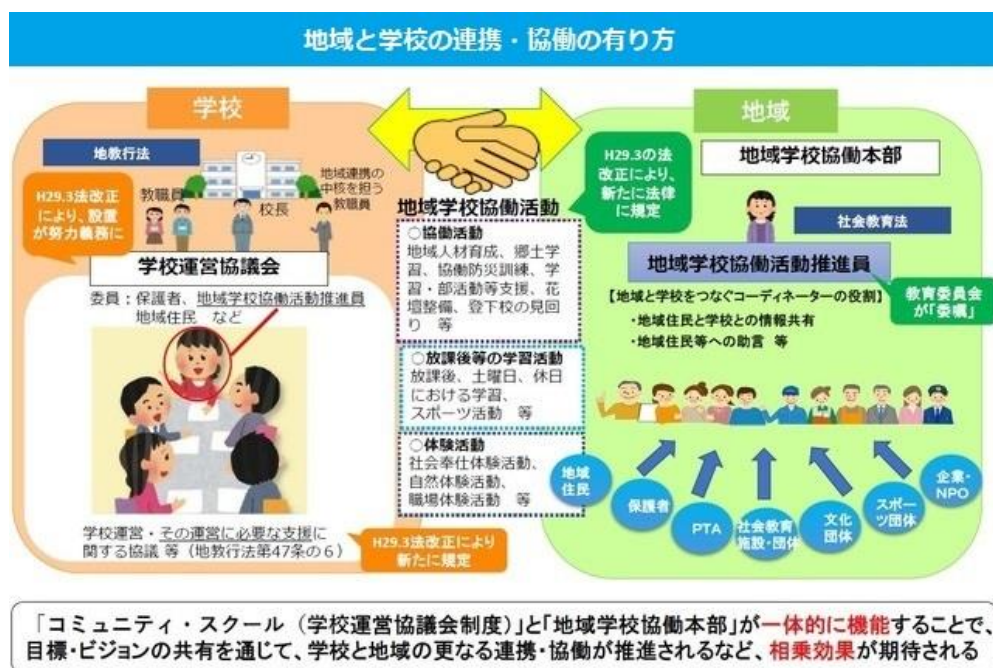
柏市では、全ての子どもの学ぶ力を育むとともに、地域全体で子どもの育ちや子育てを支える環境づくりを目指して様々な施策を進めています。

一方、私たち社会教育委員会では、子どもたちには成長のきっかけになる様々な体験が必要であるという意味で「体験のススメ 失敗のススメ」を、また「地域と学校の連携について」では、地に足のついた活動を伴う、地域と学校の連携への期待について意見を述べてきました。

これらの社会状況と一連の流れを受けて社会教育活動のあり方を考えた時、子どもと地域に対して私たちにはどんなことができるのか、より実践的な関わり方を検討すべき時であると思います。

## 社会教育行政に関する近年の動き（中央教育審議会答申）

- ① 平成27年12月「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方針について」



## コミュニティ・スクールと地域学校協働活動

学校に様々な負担が集まっている現状がある中で、学校がより良い教育機関であるために、教員の負担を軽減する必要がある。

2020年から新学習指導要領が始まり、ここで目指している教育の姿は学校の中だけでは終わらないものになっている。そこで、地域と協力して子どもたちに豊かな体験活動を保障することで、地域が学校と一緒に子どもを育てていき、同時に豊かな社会体験ができる地域社会にしていくことが必要である。

コミュニティ・スクールは、学校の負担が増えると捉えるよりも、地域が関わることで、地域も責任を持つ仕組みを作ったと考えるべきである。

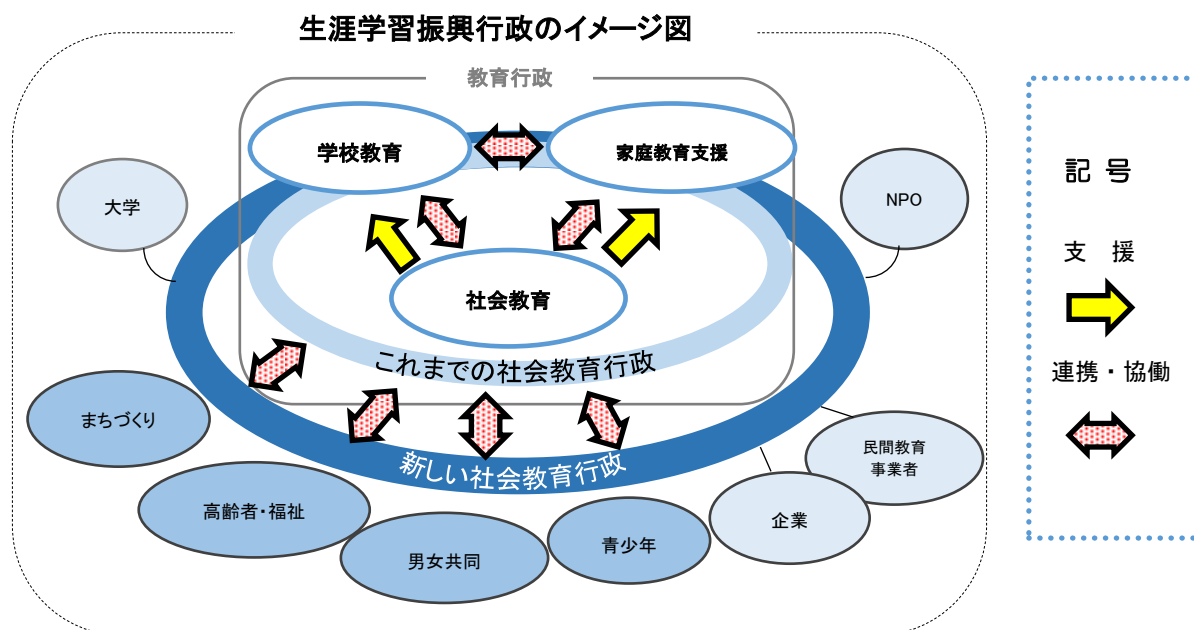
令和2年度第2回柏市生涯学習推進協議会（令和2年11月5日）より

### ② 平成30年12月「人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策について」

- ・地域における社会教育の意義と果たすべき役割  
～「社会教育」を基盤とした、人づくり・つながりづくり・地域づくり～
- ・新たな社会教育の方向性　～開かれ、つながる社会教育の実現～

人づくり：自主的・自発的な学びによる知的欲求の充足，自己実現・成長  
つながりづくり：住民の相互学習を通じ，つながり意識や住民同士の絆の強化  
地域づくり：地域に対する愛着や帰属意識，地域の将来像を考え取り組む意欲の喚起。住民の主体的参画による地域課題解決

## 社会教育の領域拡大と生涯学習振興行政



### 社会教育の領域拡大

社会教育領域が周辺を拡大し、教育行政からはみ出して様々な行政領域や団体等と関わるようになる。

その上で、学校教育・家庭教育支援とつながって生涯学習行政の中核的役割を果たすもの。

(仮) 第4次柏市生涯学習推進計画（令和3年3月策定予定）より

#### ③ 令和2年9月「第10期中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理」

ここでは、新型コロナウイルス感染症への対応を踏まえた生涯学習・社会教育の在り方に触れています。

「明日からの生涯学習・社会教育に向けて」の中では、これまでの対面による「つながり」と、新しい技術を活用したオンラインによる「つながり」を組み合わせることで、更に豊かな学びが実現する可能性を述べています。

また、「人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策について」を踏まえた今後への期待として、新しい時代に求められる社会教育の在り方は必ずしも抜本的な変革によってしか実現されないものではなく、学習者を含めた様々な主体がそれぞれの立場で創意工夫や改善を進めていくことの重要性が指摘されています。

## 2 今期のテーマ

### 仮「子どもたちの健やかな成長のためにできること」

令和元年7月、今期のメンバーによる第1回目の会議において、様々な立場の委員が集い「地域」と「子ども」についての思いを話し合いました。その結果として出てきたのは、「地域に愛着を持つ子どもの育成」を考えてはどうかというイメージです。

しかし、会議を重ね、それぞれの委員の活動や思いについて話し合う中で、これは大事なことだが目的にすべき内容とは違うのではないだろうかとの考えに至りました。

なぜなら、私たちの思いは「子どもたちに地域への愛着を持たせたい、あるいはそういう大人に育てたい」というような大人の思いで子どもたちの有り様を決めるものとは異なるからです。

それは1人の委員の言葉に端的に現れています。

曰く「朝の交通指導を長年やっているが、大人になった彼らが、道で会うと“おやっさん”と声を掛けてくれる。これがうれしい。」

子どもたちを地域のみんで育てたい、地域の大人が子どもたちの「体験」に関わることで、子どもが地域のことに関心を持ってくれたらこんなに嬉しいことはない、カッコイイところを見せられたら最高と確かに思います。

でも、本当の目的は人との関わりや様々な「体験」を通して、子どもたちには「生きていく力」を身につけて欲しい、なりたい自分の姿を実現して欲しいということなのです。

すると、私たちの考えは次の点に行きつきました。

### 「子どもたちの生きる力を育む体験に大人がどう関わるとよいのか」

令和2年度に始動した新学習指導要領に掲げられた「生きる力」を、子どもたちが自ら学び、考え、判断し、それぞれが思い描く幸せを実現すること※だと考えると、これを育むために求められるものが「体験」であると思います。

体験という社会教育の視点から地域の力でできることは何か、また子どもたちに関わる大人に意識して欲しいことは何か。

ここでは、これらについての考えをまとめ、柏市で地域と学校の連携による体験の充実が進むため、次の通り提言いたします。

※新学習指導要領解説リーフレット（文部科学省）より



### 3. 提言

子どもたちが「生きる力を育む体験」をするためには、様々な形で体験活動に参加できる環境づくりが必要です。また、そのために大人は何をどうすればより良い関わり方になるのでしょうか。

大人自身についての視点、子どもに向ける視点の2つの方向から提言します。

#### 提言①

### 「大人同士がつながろう，大人自身を楽しもう」

子どもたちの体験には、家庭（親＝大人）と学校（先生＝大人）が深くかかわっており、社会教育団体等が企画するイベントや講座が外部にあるだけでは散発的になりがちです。

これを持続的なものにするには、親による興味を引き出す工夫や、学校と連携した取組が有効と考えます。つまり、大人が自ら楽しみ、それを見た子どもたちが「仲間に入りたい」「自分もこうなりたい」と思えるようなきっかけがあるとよいと考えます。

体験の質を高めていくには、楽しいと思えるかどうかが大人も含めて大切です。

#### 大人が自発的に参加したくなる活動とは？

- ・参加条件（日程・場所・費用など）
- ・子ども（子どものためになりそう，一緒に参加したい）
- ・テーマ（楽しそう，興味深い，有意義そう）
- ・交流（新たな出会い，居心地，人の誘い）
- ・やりがい（喜んでもらえる，感謝される）

イベントや体験活動への保護者の参加が義務的で負担感を伴うものばかりになってしまったり，逆にパッケージ化された体験活動にお客さんとして子どもを参加させるだけでは，自発的で積極的な楽しい参加にはなりません。

初めは親子で気軽に楽しめるものに参加したり小さな地域活動に参加することをきっかけに，楽しんで活動するカッコいい大人の姿を目にすることができると良いかもしれません。

一方，社会教育団体等に目を移すと，各種のイベントを企画して子どもの参加を待つだけでは，新たな担い手を迎えて活動を変化・工夫し続けていくこと

に限界があります。

このような中、学校は「社会に開かれた教育課程」の形を模索しながら地域を知ろうと動き出しています。学校と地域という大人同士のつながりが次世代の体験を動かす鍵になると考えます。

### 大人の関心ややりがい（会議の発言より）

#### 子どもと親にどれだけ関心を持たせられるか

地域で門松づくりのイベントをしたら、予想を超えて100人以上集まった。子どもが楽しい経験をすると、来年もやって欲しいという要望になる。子どもがたくさん集まれば大人もついてきて、地域の大人同士の関わりがついてくる。

#### ありがとうの手紙

15年間、朝の交通指導員を行っている。先日6年生が、「ありがとう」と写真付きのお礼のコメントを書いてくれた。

そういう子どもが大きくなった時に、育った地域を自分の地域だと思って戻って来てくれたら最高だと思う。

#### 主催イベントの参加者にアンケート

○参加したいイベント・コミュニティは？／どうして参加しているの？

知的好奇心を満たせる、仕事につながりそう、人脈が広がる、居心地がいい、楽しい体験ができる、子どもに良い影響を与えられる、集まっている人が魅力的、専門家に会える、科学が好き など

## 提言②

### 「子どもを主役にしよう」

#### より良い体験のために

子どもに良い体験をさせることは簡単ではありません。芋掘りをした、木に登ったなどの行動そのものよりも一連の過程が大事ですし、何を体験するのかよりも、何のために体験するのかを大切にしたいと考えました。

けれども、学校教育の延長のような意図的にプログラムされた体験はやや窮屈です。思い通りにならないことや失敗すること、自分たちで工夫することは子どもにとって貴重な体験になると考えます。

#### 子どもたちの体験を支援する大人は

子どもがしたいことと、大人がさせたいことは違う可能性があります。また、体験から子どもが受け取る感動や達成感も、大人が期待するものとは違うかも知れません。私たちは、大人は子どもの選択と感受性を大事にする「支援者」でありたいと考えます。

- ・子どもの興味にもとづくこと
- ・活動を詰め込みすぎないこと
- ・予定通りにこだわらないこと

こんなことに時々悩みながら関わるのが良さそうです。

また、子どもが主役のお祭りを企画する時、割り当てられた役割を演じるだけでは物足りなくはないでしょうか。役の取り合いなどの摩擦も体験の一部ですし、つまらなそうにしていた子が急に積極的になったとしたら、予定通りでないとしてもその子の気づきに寄り添っていられたらと思います。

#### コロナ禍での体験活動のあり方

##### 現状は

- ・新しい生活様式ガイドラインが体験で生じる関わりを制限してしまう
- ・自然体験の活動には、工夫次第で密を避けやすい強みがある
- ・オンライン化できる活動の取組は様々に始まっている

「体験」は、一緒に遊ぶ、あるいは人と関わるのが大事な分野です。支援する大人は、上述してきた活動の良さを取り戻していく部分では、ガイ

ドラインをうまく使いながら腰を据えて対応していくことが必要になります。

一方、オンラインと組み合わせることで可能になる活動は、日々新しい取組が行われている現在、他の活動主体との連携がより必要になると考えます。

子どもを主役に大人が関わることで、様々な良い体験を共有できるようにしましょう。

### 楽しさ（会議での発言より）

#### 思い通りにならないこと

釣りに行ったが一匹も釣れなかった。でも、必ず釣れると分かっているにもかかわらず、釣れないと思う。どうなるか分からない、そういうわくわく感や思い通りにならない楽しさだったり、過程を楽しむことが大事。

#### ルールを自分たちで作ること

子どもたちが様々なゲームや遊びをすると、遊びの中で考えながら生まれてくるルールがある。

「子どもたちが考えるルール」というのも尊重できればよい。

#### もちつき

もちつきの会をやった。大人がついて食べさせるだけだと、初めは珍しくてもそのうち参加者が減ってしまう。でも、もち米を洗って蒸して一通りやるように変えたら増えた。作り方が分かって面白いし、親に教えてあげたら褒められたそう。面倒だったり危ないと避けていたけれど逆だった。

#### 4. 地域での活動事例

##### ① 柏市立大津ヶ丘第二小学校 学校における総合学習の事例

(取り上げる理由)

子どもが地域を知る為に外に出ていく取組

子ども自身による気づきが多く、地域の大人と関わる機会になる

教科横断的な学びであり、学校のカリキュラムに絡めることで保証される安定性がある

##### ② しこだ児童センター 児童センターのお祭りの事例

(取り上げる理由)

子どもが実行委員として企画・準備・実施する取組

大人はひたすら黒子の役割を担う

小学生～高校生が役割を担い、工夫して面白くする（異年齢交流）

上記の内容は、次回会議で事例紹介します

グループワークでは

提言①大人同士がつながろう、大人自身が楽しもう

提言②子どもを主役にしよう

の視点から協議していただく予定です

グループワークで出たご意見を加えた内容でこの

ページを構成、全体のまとめにつなげます

※ 事例の良い点、工夫できる点、今後へのヒントなどを記載できると良いと考えています。

学校の取組については、学校の教育目標を知った上で何ができるかを考えることがポイントの一つになると考えています。

## 5. おわりに

学校と地域の連携を進めると聞くと、一緒に新しい取組を新たに始めると考えがちです。

しかし、新たな取組が過大な負担になったり、一方だけの意図しか満たさないものになってしまっただけでは残念ですし、継続的なものにはならないでしょう。

ですから、この提言は特別なことをすることを求めるものではありません。

それぞれの取組には意図があります。まずはそれを知ることが重要ですし、理解した上で関わり方を考えれば、元々の活動の中で工夫できることがあるのではないのでしょうか。

子どもたちの生きる力を育むために、子どもたちの体験への大人の関わり方を改めて考え、地域のみんなでできることを一歩ずつ進めて行きましょう。

この部分は現時点での  
まとめのイメージです

# 參考資料

## 社会教育委員会議 協議の経過

### 【令和元年度】

令和元年7月31日 第1回社会教育委員会議

●社会教育委員の概要

●協議「今期の社会教育委員会議で取り上げるテーマについて」

過去二期に引き続き、地域で子どもを育てるという考えを念頭に議論し、子どもを中心とした地域づくりにつなげていくことを想定して協議を行った。

主な意見

- ・子どもがコミュニティの一員、担い手に
- ・ふるさと（地域）へのつながりが希薄
- ・教育格差
- ・社会体験不足
- ・子どもと関わるナナメの関係
- ・持続可能な教育が必要
- ・子どもがそこで生まれ、育むふるさとづくり

令和元年11月6日 第2回社会教育委員会議

●コミュニティ・スクールの進捗状況報告

●今期のテーマ「地域に愛着を持つ子どもの育成について」

●協議「子どもに地域への愛着を持たせるためには何が必要か」

前回協議の意見から、地域に愛着を持つ子どもの育成は重要であると認識し、社会教育委員会議では「愛着を持てる環境をどのようにつくっていくか」について議論を行った。

主な意見

- ・まず、親や地域の大人がつながることが必要
- ・大人自身が楽しめるかが大事
- ・子どもに行事で役割が与えられていること
- ・子どもにとって楽しい経験となったかが重要
- ・イベント等を通じて、子どもが認められたり大事にされた体験が大事
- ・「地域への愛着」は良いテーマだが、愛着はゴールだと思うし目的にすると息苦しくなる
- ・「愛着」は与えられるものではなく、その人から出てくるものだろう



令和2年2月26日 第3回社会教育委員会議

●子どもの地域への愛着を育むために必要なこと

前回協議の意見から、大人がつながり楽しむことと、子どもにとって楽しい体験であること（地域での役割があること）の2点が重要と考え、議論を具体化した。

●事例発表 大人のつながり、楽しみながら地域へ参加の参考となる活動として

羽村太雅委員 柏の葉サイエンスエデュケーションラボ会長

「科学コミュニケーションを通じた地域交流の活性化」10年の活動の軌跡

「科学コミュニケーションを通じた地域交流の活性化」10年の活動の軌跡（一部抜粋）

柏の葉サイエンスエデュケーションラボ

★ 柏の葉で、科学コミュニケーションを通じた「地域交流の活性化」を目指して活動

★ 2010年6月設立

どんな人がいるの？（全44名）

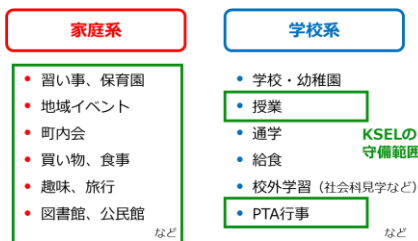
★ 東大などの院生・研究者 15名

★ 地元の人など

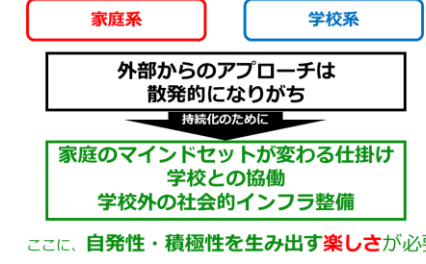
- 学部生 4名 高校生 3名
- 若手社会人 3名 主婦 6名
- 卒業生 9名 オジサン 5名



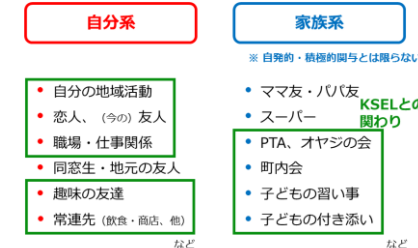
子どもと地域コミュニティ／風土の関わり



子どもと地域コミュニティ／風土の関わり



大人と地域コミュニティ／風土の関わり



大人と地域コミュニティ／風土の関わり



活動事例 | コミュニティ／風土との関わり



地域への愛着をはぐくむには



地域別・テーマ別には各種接『点』あり  
複数課横断&ビジネス視点導入による  
全市的な『面』的接触への拡がりを期待

## 質疑

- ・人を集めるのは大変だと思うが、どのようなことをしているか。
- ⇒活動の中で関わってくれた人が、継続的に関わってくれていたり、実際に参加した方の口コミ等で輪が広がっている。
- ・人気のあるイベントはあるか。
- ⇒理科の修学旅行，研究者に会いに行こうは定員を超える申し込みがある。チラシのデザインやテーマ設定に力を入れている。

- 協議「大人（親）がつながる方法や大人が楽しみながら地域活動に参加するにはどのようにしたらよいか」

## 主な意見

- ・中心に子どもの笑顔があること
- ・地域活動のお客様として参加するだけでは面白さは半減する
- ・大人が子どもに伝えたいものを持っていること
- ・小さな活動をつなげること（行政の関与も必要）
- ・親が子どものためと思える取組
- ・親子で参加や体験ができること
- ・子どもがしたいことを大人が手助けする
- ・地元の誇り，風土を知ること
- ・コミュニティ・スクールを通じて学校と連携を進めるのが効果的

## 【令和2年度】

令和2年8月28日 第1回社会教育委員会議

### ●提言の骨子「(仮) 地域に愛着を持つ子どもを育むために」について

「地域への愛着」は目的ではなくキーワードとして大事にすることとし、表現を検討していく。

### ●講話 青山鉄兵委員 文教大学准教授

「子どもの体験にどう関わるか」

子どもが育つ生育環境の変化から、子どもは大人が与えないと体験ができなくなった社会という前提がある中で、体験が教育的であることはある程度やむを得ない。

しかし、一歩目に関わる大人が体験を意識することで、与える体験の中にも体験らしさが残る。

### 子どもの体験にどう関わるか (話題提供資料より一部抜粋)

#### 子どもの体験を考えるための前提

##### ◇体験活動への社会的な注目

- ・子どもが育つ環境の変化
- ・子どもの「体験不足」という指摘
- ・体験を通じて育まれるものへの期待
- ・「自然にできるもの」から「わざわざ体験させるもの」へ
- ・「わざわざ体験させる」ことによって生じる課題

#### より良い体験のために～大人の関わり方を考える～

##### ◇「体験」を体験させることの難しさ

- ・何を体験させるべきか？
- ・どうやって体験させるべきか？

##### ◇支援者にもとめられる2つの視点：「教育的であること」と「教育っぽくないこと」

- ・教育的意図にもとづく体験のデザイン
- ・教育的な意図だけでは不十分
- ・支援者側のポイントになりそうなこと

##### ◇コロナ禍での体験活動のあり方

- ・コロナ禍での体験活動の動向
- ・「遊び」や「一緒にいること」の価値～濃厚接触へのこだわり～
- ・ソーシャルディスタンスはあっても「すき間」はない！？
- ・不信と分断を生まないために～ガイドラインとの付き合い方～

#### 主な意見

- ・普段興味のないことにも大事なことがあるので、親も意識して体験や勉強をさせるようにしたいし、子どもに近道を要求しすぎないようにしたい
- ・体験は生涯学び続けるための基礎として大事という位の意味で捉えるべき
- ・教育的という言葉も立場によって様々な考え方があがる
- ・子ども自身が探求する力をつけることは「生きる力」にもつながる

・大人が心配し過ぎた結果子どもが窮屈になる面もあるので、楽しい、嬉しいなど、子どもながらの楽しみが見いだせるシンプルな発想も大切

●協議「子どもが楽しいと思える経験とはどのようなイベントや活動があるか」

#### 主な意見

- ・気軽に親子で参加できるもの
- ・思い通りにならない体験も必要
- ・子どもの発想で地域の歴史を調べる
- ・柏版キッサニア（柏ならではで、かつ、子どもが主役）
- ・子どもが本気でやった実感をもてる体験
- ・地域の取組を学校にそのまま取り入れるのは難しくても、地域と学校の両方が少しずつお互いを取り入れる
- ・大人がやりたいことを副産物として仕込み、子どもが参加したくなる看板を

## 柏市社会教育委員会議 委員

議 長	寺本 妙子	開智国際大学教授
副議長	常野 正紀	多世代交流型コミュニティ実行委員会代表
	岩田 久美	柏市立柏第四小学校長
	杉本 秀彰	柏市立柏第二中学校長
	門井 隆志	柏市子ども会育成連絡協議会長
	坂巻 勝	柏市青少年健全育成推進連絡協議会副会長 ※任期：令和元年6月1日～令和2年12月2日
	内藤 正寿	さわやかちば県民プラザ所長 ※任期：令和元年6月1日～令和2年3月31日
	岩崎 雅夫	さわやかちば県民プラザ所長 ※任期：令和2年6月1日～令和3年5月31日
	根本 利治	柏市ふるさと協議会連合会長
	羽村 太雅	柏の葉サイエンスエデュケーションラボ会長
	村田 静枝	柏市ストップ温暖化サポーター 元我孫子市社会教育指導員
	吉田 智紀	柏市P T A連絡協議会長 ※任期：令和元年6月1日～令和2年5月31日
	前川 万	柏市P T A連絡協議会長 ※任期：令和2年6月1日～令和3年5月31日
	伊藤 薫	柏市民生委員児童委員協議会副会長
	牧野 篤	東京大学大学院教授
	青山 鉄兵	文教大学准教授
	本多 紀子	公募委員

任期：令和元年6月1日～令和3年5月31日